［翻訳］

カントの義務論と幸福論†

ゲオルク　ジンメル
矢崎　慶太郎[*1]〔訳〕
中林　練[*2]〔訳〕

哲学者の人生観というものは多くの一般大衆の人生観とはいろいろな点で違いがあっても，シラーが「感覚的幸福と魂の安らぎとのあいだ」の選択として打ちだした問題に煩わされているという点で，その問いと結論は共通している．

人生で行為が必要になるときには，どれだけ外面的〔行動的〕な決断であろうと内面的〔心理的〕な決断であろうと，一般的に言って，行為者自身の幸福に役立てるか道徳的（sittlich）な義務を満たすかの二者択一に直面する．

この両方の場合において，ここでは行為する存在という，最終的にすべての他者に還元することのできる主題を扱いたい．

人生に満足し内面的な安らぎを得るのは，〔個人の幸福と全体の義務との〕両方の動機が等しくかなえられる場合だけである．なぜなら個々人の不満がたまると，私たち全体の感情がどこまでも後回しになるからである．しかしさらにもっと言うと，みんなを満足させようとして自分がうまくいかないという，私たち〔行為する〕存在が最終的に下す判断基準の不一致が，〔社会においても個々人において〕生活の全体像をどうしようもないほどバラバラに解体するに違いないからである．

それゆえにソクラテスに始まる全ての道徳哲学者は，道徳的な要求と個人の幸福のあいだには本当の意味での矛盾など絶対にありえないことを証明するのに全力を尽くした．

ソクラテスによると，自ら悪である人などいない．不道徳であることはたんなる理論的な間違い〔を犯しているだけ〕であり，〔それに対して〕知恵のある者はいつも道徳的である．この奇妙な命題は，徳（Tugend）と幸福は一致するという無邪気

---

† 出典：Simmel, Georg, 1903, „Die Lehre Kants von Pflicht und Glück“, Max Henning Hrsg., *Das freie Wort: Frankfurter Halbmonatsschrift für Fortschritt auf allen Gebieten des geistigen Lebens*, 3(14): 548-53.

*1 専修大学ソーシャル・ウェルビーイング研究センター kei.yzk.15@gmail.com
*2 慶應義塾大学大学院文学研究科，ボン大学大学院哲学部

な前提に基づいているに過ぎない.〔この前提によると〕どんな状況でも全く同じ行為が義務と自己の利害を満足させるのだから, 理性の喪失, 欠落した行為の認識は, 幸福の回り道に過ぎない. 道徳的な行いは, 同時に行為者の主観的な幸福への関心を満足させることになるのだから, それをしないことは, もちろん愚かであるに過ぎないのである.

徳と幸福が一致しないことなど無数にあるし, もちろんそれは〔古代〕ギリシアの生活にも見られることであるにも関わらず, このギリシア人〔ソクラテス〕は私たちよりもずっと素朴に両者の一致を信じていた.

彼にとって本質的に徳とは, 政治的なものであり, 国家の富と権力に効果を発揮するものであった.

そしてこのようなギリシア国家にとっては, 安全保障, 名声, 富といった, 全体を強化すれば諸個人が満たされるものを認識させれば充分だったのである.

ある共同体が小さく単純であればあるほど, それゆえその個々の構成員との連帯が強ければ強いほど, 全体の利益になるものは, 個人の利益にもより容易に直結することだろう.

このことは, 義務を含んだ行為とは幸福を促進する行為でもあるということに他ならない.

社会の規模が拡大すると, 個人はより大きな, それゆえ中心からはさらに遠く離れた周辺部へと追いやられ, 社会が課す義務と与える幸福とを直接一致させてきた利益共同体はバラバラになる.

そして古代以来経験してきた精神的 (seelisch) な動向が, ますます主観的なもの, 人格的なもの, 内面的なものへと方向転換すると, この種の不調和の問題はずっと重苦しく不安定なものになる.

何が私たちの幸福であり何が義務であるかは, 外的な判断基準には依存しなくなっているし, 普遍的な規範からも決定されなくなっているのだ.

まさにそれゆえに個人が自身の力で両者を調和させることはますます難しくなっているように思われる. 幸福が生じるのは個人の存在が私たちの運命と〔政治のような〕外的権力から離れるときであり, 我々が持ち出せる道徳の基準とはますます無関係にむしろ対立的になっている.

哲学的な考えはそのことに満足しないよう自らを戒めるものだ. 哲学の領域においては, 多かれ少なかれ軽率な楽観主義が繰り返される. それは平均的な〔素朴な,

普通の〕人間が生活（Dasein）上のさまざまな基本欲求を〔道徳と〕調和させようとするのと同じである．その結果，「誠実さはいつまでも残る」とか，どんな罪にも必ず報いがあるとか，あの世で審判者が義務と幸福を精算してくれたりするのである．

たいていの道徳哲学も，徳はもっとも確実な幸福への道だとか，両者〔義務と幸福〕は同じ内面的な現実の側面〔コインの裏と表の関係〕だと主張することにはあまり批判的ではない．あるいはスピノザが主張したように，幸福とは徳それ自体であり，徳〔のある行いをしたこと〕の報酬〔が幸福なの〕ではない．

どんなポジティブな幸福も不可能だと考える悲観論でさえも，道徳的な理想に従順になることで，少なくとも人生の苦労にはなんとか耐えられるようになるし，苦悩の量は最小限になるだろうと表明することが多い．

なるほど道徳哲学のひとつの大きな目標は，道徳と幸福との連帯が内面的に必要であることを証明することにあるとは確かに言える．

例えば神学ドグマを証明する場合なら仕方ないにしても，しかしこうした研究というものは，ふだんよりもずっと先入観にとらわれていて，確信に満ちた心の欲求によって最初からその結果を確定しているように感じられる．

これら〔道徳と個人的な幸福〕を和解させようという一連の試みに対して独りで立ち向かったのはやはりカントである．内面的な両者の結びつきは，必要でないし，証明することもできないというのである．

私たちが幸福を追求しても徳に至ることはない．そのことでもってカントが裁いたのは，徳こそまさに啓発された自己利益であるという広く知られた信念である．それ〔啓発された自己利益〕とは，まるで継続的な幸福も，深みのある幸福も，たんにありふれた幸福も，道徳的行動の価値によってのみ得られるとでも言うかのような信念である．

幸福が必ずしも徳へ行き着くわけではないことに加え，彼は善意をひいきした退屈な理論にも反論している．〔こうした理論は〕あらゆる善い行いに具体的なものでなくてもせめて内面的な報酬を確保し，あらゆる悪い行いにたとえ物質的なものでなくてもせめて宗教的な刑罰を課そうとする．

カントが考えるところでは，むしろ幸福は外的なチャンスがあるかどうか，およびそれをうまく利用するかどうかに左右されるのである．さらにこの意味で活力や生の喜びといった内面的なチャンスもここに付け加えることができるであろう．

幸福と苦悩は，主体の欲求とそれを取り巻く社会的，物理的，情緒的な運のめぐ

り合わせという偶然的な関係なのだ．まさにそれを人間の道徳的行動に従属させることは論理的でないし，経験的にも正当化されない．

髪の色と音楽の才能が関係していないのと同様に，原理的には相互にあまり関連していないというのが我々という存在の基本である．

この単純に見える主張の本当の価値を感じるとるためには，道徳哲学者にとっての，またおそらく特にカントにとっての，〔幸福と道徳という 2 つの〕理想をまとめ調停することへの強い関心に注目する必要がある．

幸福と道徳，実際に生きているすべての人はこのなかで揺れ動いているのであり，それは倫理的な思考を作動させる本来的で究極的なテーマなのである．

両者の一致につながるのは，したがって個人（Seele）と社会（Welt）とを調和し，円満にし，内面的にむすびつけることである．

極めて高価な理想を犠牲にして，カントは道徳哲学全体が紡ぎ出してきた両者の結び目を断ち切った．〔道徳的な理想の〕値段がどれだけ高いかを査定すれば，おぞましい気持ちになるが，その確固たる信念，真実への飽くなき探究心がわかるだろう．〔その探究心というのはつまり〕幸福と徳とが関連していないことを冷静で事務的・抽象的に評価し，他人に対しても自分に対しても容赦がない探究心である．

カントによれば道徳には幸福になるだけの価値はなく，既存の世界秩序内部においてこの価値は絵空事に過ぎない．我々の最も内面的な欲求である徳と幸福の調和，報酬と刑罰の公平性といったものは，道徳をさらに変化させようとするが，道徳がその変化に報いることはない．

中世には神話や宗教のなかで生まれた幸福への深い憧れは，ルネサンスの高度な芸術作品のなかで満たされたものの，しかし例え話や美化によってそうしたに過ぎなかった．

近代の人間にとってその憧れは，知的に意識された要求になった．とはいえ，その要求がより重要で激しいものになったのは，それが拒否されたためなのか，ときどき満たされたためなのかは誰にもわからないが．

この点についてカントより詳しい人はいないだろう．正当でないかなり残酷な偏りのあるやり方で彼は，直接道徳的な性質を備えていない，私たちの主観的な意欲がもつ価値と重要性のすべて，こうしたものを無条件に幸福への関心という概念へと一緒くたにまとめたのである．

これと同じ態度，同じ偏りで，彼は実際の生活のなかで客観的価値と呼べるものすべてを道徳性という概念に一緒くたに縮減した．

幸福と道徳を相互に異なる質と見なすことで，カントは理想の世界を抜けでて，人間の心の真ん中に大きな線を引いたのである．

このことにより，現実は，根本から新しい立ち位置へと変化した．何をしたいか，何をすべきか，という極めて内面的な過程で形成される二つの傾向は，様々な立場から出発して，様々な目的へと行き着くのであり，それらがすべて一同に収束していく源泉を想定することはできないのである．

冷酷な二元性とうまくつきあわなければならないのなら，これらの 2 つの道を同時に進まなければならない．かつては両者が交差することをこっそり期待してきたのだが．

それによって考えは新たに純粋なものになるし，感情も突出して誠実で明白になる．

もちろん，いまや道徳性は支えを失い，いつかは報酬が貰えると期待することも，道徳的な意味があるという理由で幸福追求を正当化することもできなくなる．

いまや幸福は幸福自体で，道徳は道徳自体で，それぞれ固有の恩恵から成立しなければならない．〔幸福や道徳という〕主要な原理がそれぞれ独断的であることで，悪循環に陥るかのようにそれぞれがそれぞれの観点を欺瞞に満ちていると思うようになったとき，生活には異なるレベルの強さと心情が必要になる．

全般的に人間組織の発展が高度になり，個々人の欲求が独立したことが，我々の存在の根幹にまで影響するようになった．近代的人間にとって自由への欲求が，人間のあり方の根本にまで内面化していき，誰もが他者から独立しているのが当たり前になったのである．

まさにここで論じていることは，本当に人生の根源においてまでこれらの傾向が相互に独立しているということなのである．

このことは不明確あるいは横暴な楽観主義を悲観的な方向性へと逆転させることではない．〔例えば〕高尚なものは必然的に幸せから離れる運命にあるとか，不道徳の価値によって幸福は得られるものだとか，世俗的なものごとの根本的な秩序は悪の勝利を目指しているとか．

宗教的で，冷笑的，憂鬱的，悪魔的な世界観のなかには，幸福と道徳のあいだの相反するこのような関係を支持するものがある．

カントにも悲観主義的なところがあり，〔幸福や道徳といった〕本質的な傾向が自立していることは，楽観主義者の心底からの希望を断念させることになるわけであるが，まったく別の兆候を示すことになっても，彼はこれを新たな相互連関へと変

換したのである．

もし徳が幸福の獲得には繋がらないのなら，そのときはたしかに悪徳もやって来るに違いない．〔道徳と幸福の〕外的な運命のつながりと〔幸福・道徳それぞれの〕内面的な運命の発展が，悪徳をも幸福と認めるかもしれない．

道徳が苦悩や禁欲へと必然的に移行してしまう場合や，より安定した幸福を得るという危険な魅力がそれほど羨ましく思えない場合，道徳的な領域の独立性と感覚的な領域の独立性が揺さぶられることも珍しくないだろう．

しかしカントがこのような区別をした最終的な根拠は，道徳的義務という事実は感覚を越えた秩序にまで高められるだろうという確信であった．あるいはむしろ，道徳的義務は，我々の営みの核となる感覚的エネルギー以上のものを示すという確信であった．

疑いもなく人間には，どんなエゴイズムにも，どんな人格的な素質にも，どんな自己保存や本能にも逆らって義務に服する能力がある．それは我々の存在のある一部分によって，「自然（Natur）」と呼ばれがちな我々の営みの一部を越える能力である．

まさにその部分は，我々の社会（Existenz）全体にあてはまるわけではないし，しばしば非現実的な要求や可能性として存在するに過ぎないものであるが，これを我々は自分たちが存在することの本質的な価値と感じるのである．この本質的な価値がなければ，他のすべての行いや所有物は取るに足らないものになるし，内面的な自己感情は無意味なものとなる．

そう，道徳とは自由な人間だけに備わる価値であり，我々が自分自身に与えることのできる唯一のものなのである．

生活における他の財や価値のすべてが，自然の定めと不可分であり，どこもかしこも必然性に依存しているのに対して，義務を満たすかどうかはもっぱら我々の手に握られている．そしてこの点において，どんな責任回避も，外部の存在に結びつけることで帳消しにされるしかない．

人間の営みの勝利だといえるのは，この最高の価値が我々の社会全体にとって最も固有であり，最も人格的であり，最も中心的な価値であるという点である．つまり，我々が我々自身でいられる状況とは，同時にもっとも価値のある状況においてだけである．別の言い方をすると，我々の存在の価値が最も上がるのは，我々の行為全体が，我々に最も固有の内面を表現している場合だけであり，我々の外部にあるものから完全に自由である場合だけである．

我々の存在価値は，それ自体に責任を負う自由と決して不可分ではないというカントの発見は，いまだに衰えていない．

この点にこそ道徳と幸福との独立を必要とする本質的な議題がある．

もし我々の道徳的な行いが，幸福の迂回路でしかないのなら，そのとき我々の自由は，我々の存在の外部にある権力に組み込まれることになり，権力の恩恵なしには幸福を実現することはできなくなる．

生活に外から働きかけてくるものに対する自己の独立性は，近代的な意識にとって最も高価な財産であり，最低限の「自由」であり，同時に最大限の「自由」でもある．道徳とは我々の自由の場所であり担い手であり，その意義は自分で責任を引き受けるということにあるのだから，道徳がたんに幸福への手段に過ぎないというのであれば，こうした自己の独立性は絶滅させられてしまうであろう．自己の独立性というのは，感情の受動性や依存性をつねに意味する幸福感に通ずるような我々の自己が起源となってのみ育まれるものである．だからこそ，雨や太陽の光のように我々のまわりを取り囲み，自分たちの意思からは独立している感覚に従順になってしまう強制的な状況からは奪うことのできない唯一の自由価値が自己の独立性である．

我々の本質的な諸欲求を独立させることが必要だったため，カントは幸福と義務の古い欺瞞に満ちた関係性を壊した．それによって，〔幸福と義務の〕両者が分離していることの冷酷さが明らかにしたのは，人間全体が自由であり，自らが存在していることの無条件の内面的な価値を持っているということである．

［付記］　〔　　〕は訳注，（　　）には原文の言葉を掲載した．一段落が非常に長文になるため，一文章ごとにそれぞれ改行し，段落間は一行切り離すことで明示した．